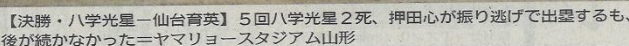


アム山形で決勝を行った。青森第2代表の八学光星は、仙台育英（宮城県）に2-7で敗れ、2年ぶりの優勝とはならなかった。仙台育英は8年ぶり13度目の優勝。

（小嶋嘉文、大西桂介）

八学光星 020 000 000 | 2
 仙台育英 031 001 02× | 7
 (八) 北口、及川一米澤
 (仙) 井須、刀祢、尾形一川尻、倉方
 ▷三塁打 砂(仙) ▷二塁打 中岡、川尻、
 和賀(仙)
 ▷暴投 刀祢(仙)
 ▷試合時間 2時間31分

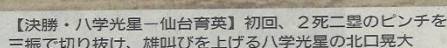
【評】八光星は二回2死二、三塁、北口が中前打を放って2点を先制。その直後、先発の北口が5連打を浴びて3点を失うと、三回にも1点を献上した。継投した及川も相手の勢いを断つことができなかった。打線は7連続で三振を喫するなど、相手投手陣を打ち崩すことができなかった。



○、八斗星先発の北口晃大は立ち上がりは上々で、投打で見せ場を作ったが、５回４失点で降板。「悔いの残る投げミスがあった。最小失点で切り抜けたかった」と唇をかんだ。

攻撃では「一回に２点適時打を放ち、流れを呼び込んだかに見えたが、直後

のマウンドで５連打を浴び、逆転を許した。」（変化球頼りで、甘く入ったところを狙われた。立て直したかったが、こすりを狙ってしまった。）と反省。伸びしろ十分の２年生石腕は、「下半身を強化し、９回を投げ切れただけの体力を付けたい」と目標に掲げた。

[illegible]

強豪相手に散発4安打

「点差以上に大きな差があった」。2-1で敗れた仙台育英との決勝後、主将の山上春人は言葉を絞り出すように振り返った。自慢の打線は2

点を奪ったものの、散発4安打と沈黙。投手陣も15安打を浴びるなど、全国屈指の強豪を前に、現在の実力を思い知らされる厳しいゲームとなった。

二回には2四死球からつかんだ好機で、鮮やかに2点を先制。この日も好調な打線が

火を噴くかとみられたが、三回から登板した相手右腕に苦戦を強いられる。

130分台後半の直球と、縦に曲がるスライダーに手玉に取られ、中盤には7連続3振を喫した。メンバーで話して狙い球をスライダーに絞ったが、想像以上の曲がり方で

リレーを演じたものの、力強いスイングで迫る仙台育英を相手に再現とはいかず、バツクの助けを得て何とかしのぐしかなかった。

仲井宗基監督は「粘り強さが出てきたが、やはりしつかりとした実力があつてこそ。そういう意味ではまだ足りない

悔しい結果となったが、打線の復調やエース格の戦線復帰など大会を通じてチームは成長も遂げた。「この大会で得たものは大きい。夏の本番へ向けてさらにチームを強くしたい」と山上。2年ぶりのの「聖地」をしっかりと見据えた。

(小嶋嘉文)

完全に捉えきれず、三回以降は本塁にたどり着くことができなかった。

かった」とうなだれた。主砲の久保諒之輔は「夏を勝ち抜くには、圧倒的な打撃力が必要だと感じた」と課題を挙げた。